

Human Security of Local Communities Related with Utilization of Fuel Woods and Water (ラオスとギニアの比較)

小林繁男

5 Keywords: 「人間の安全保障」、ラオス、ギニア、生活燃料、森林の再生

1994年に国連が「人間の安全保障」を提唱し、会議でも盛んにいわれるが、いまだ人間一人ひとりに焦点を当てた定義はなく、自国の利益やニーズに固執している。発表は、こうした国際的動向を踏まえ、貨幣経済に頼らない地域社会の暮らしに不可欠な生活エネルギーと水といった国内の生体資源に焦点を当てる。

ラオスのケース： 中国国境付近の NH 村と、都市 LNT の生業、収支の比較。NH 村の平均収入は約 308 ドル（米、NTFPs）、年は約 2228 ドル（ビジネス、米）である。村の方は光熱費が安く水も費用がかからないが、収支はほぼゼロに等しい。年は光熱費がかかるが、770 マン Kip の貯金が可能である。年の光熱費は村人の収入の 62%に相当するので、村に自然資源がなくなったら人々の生活は苦しくなる。村人は現在は湧水を利用しているが、木炭を得るための焼き畑が森林の再生速度を超えるローテーションの速さで行われれば、森林は減り、水も涸れ、人々は移動を迫られる。しかし、どこも既に人が入っているので難しい。

ギニアのケース： ニンバ山付近の 33 カ村、10 都市にて調査。収入は 1136 ドル（米、畑作持つ、家畜の飼養（飼育？）、NTFPs）非農業従事者の方がはるかに収入が多いが、農村から都市に出稼ぎに出ても雇用機会が乏しく、こうした層は都市の貧困層を形成する。木炭は南米・アフリカで、薪は東南アジアやアフリカで利用が増え、今後も重要な燃料である。森林の再生に要する時間を考慮し、森林がもつ生態的価値を失わない利用法が求められる。

森林を守ることは生活エネルギーとなる薪を増やし、干ばつや飲料水汚染の防止にもつながることであり、貧しい人々の生活にとっても重要な課題である。

（記録：宮崎由伊）